

“I’m lovin’ it”って おかしい？



—マクドナルド社は
「文法」を犯したのか—

本記事のタイトルにある“I’m lovin’ it (=I’m loving it)”は、世界的ハンバーガー店であるマクドナルドのCM等で2003年から2019年まで使用されたキャッチフレーズである。このフレーズでは動詞“love”が現在進行形で使われているが、英語を勉強したことがある人なら「loveは進行形にしないんじゃないの？」と疑問に思うかもしれない。なぜならば、英文法書の中には、英語の進行形では状態動詞を進行形では使用しないと記載しているものがあるためだ。たとえば、『Vision Quest 総合英語 3rd Edition』では、現在進行形の基本編での解説において (p. 62)、「進行形になるのは原則として動作動詞だけで、belong, have (持っている) やknowのような状態動詞は進行形にしてはならない」と明記されている。事実、動作動詞で表される行為を表現する場合、動詞は(1a)のように現在形で表現され、(1b)のように進行形で表現されるのは不適格である。

- (1) a. John loves Yoko.
b. *John is loving Yoko.

英語の動詞は、“walk”や“write”のようにある対象の行為や動作を表す「動作動詞」と、“know”や“have”のように対象の状態を表す「状態動詞」に大別され、“love”は後者に属す。すると、このキャッチコピーは状態動詞を進行形にするという、本来であれば禁じ手を犯していることになる。では、なぜマクドナルド社はあえて“I’m lovin’ it”と表現したのだろうか。

この問いを解決するにあたり、動作動詞／状態動詞と現在形／現在進行形の関係を理解する必要がある。なぜならば、これらの動詞や時制の組み合わせによって、表されるできごとの捉え方が異なるためである。

英語の動作動詞を用いた進行形が表す出来事の時間的なとらえ方を理解するために、まず、英語の現在形と現在進行形を比較する。久野・高見(2013)によると、英語の現在形の用法として、以下の3つを挙げている。

- (2) a. 現在の状態
I smell something burning. (久野・高見 2013: 15)

実は状態動詞が進行形をとるケースがもう1つあるのである。次の(8)で、状態動詞が進行形になるさらなる例を示す。

- (8) a. I’m forgetting things these days.
(最近、もの忘れをしがちだ)
b. I’m hearing strange noises.
(奇妙な音が時折聞こえる) (ibid.: 92)

(8a)は、話し手が最近、何かを思い出せないことが多くなってきたことを述べ、(8b)も、話し手が一定の時間内で、変な音が断続的に聞こえていることを述べている。このような断続的な状態も、(6)の英語の進行形の意味に当てはまる。したがって、“forget (思い出せない、忘れている)”、“hear (聞こえる)”自体は状態動詞であっても、(8)は、それぞれの出来事が断続的に一定の時間内で起こっていることを示している。

“I’m lovin’ it”は、この断続的な状態の例であるといえる。前提として、動詞“love”には、目的語に食べ物である名詞句をとって、主語である対象がその食べ物を「美味しい」と判断している状態を表す用法がある。この用法が進行形となることで断続的な状態を表すと、「マクドナルドを食べるたびに美味しいと思う」、「何度食べても美味しい」という意味を表すことになる。つまり、“I love it.(美味しい)”という話し手の気持ちが食べるたびに重なり、「美味しい」という体験の連続体として示されることになるのである。

以上からわかるように、“I’m lovin’ it”は、「私はマクドナルドが好き」という、話し手の一定した永続的な気持ちを意味しているのではない。「何度食べても美味しい」といった断続的に湧き上がる感情を表している。普通なら“I love it”というところを、このように進行形を用いて「食べる度に美味しい」という動的で臨場感のある意味合いを出すことで消費者の注目を引いているのである。マクドナルド社のこの一見「文法犯し」に思えるキャッチコピーは、消費者がハンバーガーを何度も食べる度に「美味しい」と満足してほしいという想いが込められているのかもしれない。

引用文献
久野暉・高見健一 (2013) 『謎解きの英文法 時の表現』くろしお出版, 東京.
(宇田川凜)

- b. 現在の習慣的動作・出来事
We play soccer after school every day. (ibid.: 19)
c. 現在の動作・出来事の実況的報道
Evans passes the ball to Rooney, who heads straight into the goal! (ibid.: 21)

現在の状態を表す(2a)は、主語である「私」が発話時点で「何かが燃えている」臭いを知覚している状態であることを表している。また、現在の習慣的動作・出来事を表す(2b)は、主語である「我々」が毎日放課後に「サッカーをする」習慣を持っていることを表している。最後の現在の動作・出来事の実況的報道を表す(2c)は、それぞれの選手が「パスを出した」ことや、「ヘディングした」ことを実況的に表現している。この他にも、現在形には、以下のような過去や未来に起こった出来事を生き生きと表現するのに使用される場合があるが、これらの例は(2c)の用法に含まれるとしている。

- (3) a. Benjamin Franklin writes that early to bed and early to rise makes a man healthy, wealthy and wise.
(ベンジャミン・フランクリンは、早寝早起きにより健康で裕福、そして賢くなると記している)
b. My son graduates from college next spring. (ibid.: 27)
(息子はこの春に大学を卒業する)

久野・高見は、上記の英語の現在形の意味を(4)のようにまとめている。

- (4) 英語の現在形は、動詞の表わす状態や動作・出来事が発話時を中心とした現在において起こっていることを表わす。(ibid.: 26)

以上が英語の現在形の表す意味であるが、ここで注意すべきは、それぞれの用法に応じて使用される動詞の種類が異なるという点である。例えば、(2a)の現在の状態では、当然ながら状態を表す状態動詞は使用されるが、状態を表さない動作動詞はこの用法では用いられない。

では、動作動詞の状態を表す用法が存在しないかというと、そうではない。動作動詞が表す行為も、進行形にすることで「動作が進行しているという状態」として表現することができる。久野・高見によると、英語の進行形には、以下の3つの用法が存在する。

- (5) a. 発話時 (あるいは発話が指し示す時点) に進行している動作
She is playing the piano.
(彼女はピアノを弾いている)
b. 同じ動作主によって断続的に行なわれる動作の連続
I am reading the Bible every day.
(私は毎日聖書を読んでいる)
c. 異なった動作主によって断続的に行なわれる動作の連続
The guests are arriving.
(お客さんが次々と到着している) (ibid.: 65)

発話時に進行している動作を表す(5a)は、主語である「彼女」がまさにピアノを弾いている状態であることを表している。また、同じ動作主 (=動作の主体) による断続的な動作の連続を表す(5b)は、「私」が毎日途切れ途切れながら聖書を読むという行為を継続していることを表している。最後の異なる動作主による断続的な動作の連続を表す(5c)は、別々の「お客さん」がバラバラに到着し始めて、これからもそれが継続することを表している。

久野・高見は、英語の進行形の意味として、これらの用法を以下のようにまとめている。

- (6) 英語の進行形は、継続的、または断続的な動作・出来事が一定の時間内で進行、連続していることを表わす。(ibid.: 69)

ここで注目すべきは、(6)の英語の進行形の意味が、「継続的、または断続的な動作・出来事」の進行、連続を表すという点である。この意味が、冒頭に述べた英語の禁じ手に結びつく。つまり、進行形はその基本的な意味として「動作・出来事」の進行、連続を表すために、動作・出来事を表さない状態動詞が用いられないという結果となるのである。

これにより、(1)では(1b)のように進行形で表現されるのは不適格で、(1a)のように現在形で表現しなければならない理由が明らかとなる。(1)は、主語が指す人物の過去から現在に至る「愛している」という永続的な状態を表しており、動作・出来事が一定の時間内で進行しているわけではない。したがって、(1b)の文は(6)と合致せず不適格となる。これに替わり、このような永続的で一定不変の状態は、(2a)で確認したように状態動詞の現在形で表される。以上が、(1a)の文が適格であり、(1b)が不適格となる理由である。

それでは、“love”, “respect”, “have”のような状態動詞は進行形になることはないのだろうか。結論から言えば、状態動詞も進行形になる場合がある。その1つは、状態の段階的な変化を表す場合である。例えば、「人を好きになる」という状態変化は、「一目惚れ」ということもあるが、「少し好きになる→大分好きになる→とても好きになる」のように一定の時間内で好きになる程度が少しずつ変化し、最終的に一定不変の好きな状態に入ることもある。そしてこの変化していく過程が継続、進行している様子は、次のように進行形で表すことができる。

- (7) I’m loving you more and more each week.
(僕は君のことが週ごとに好きになっていっている) (ibid.: 90)

(7)のように変化していく過程の継続は、まさに(6)の進行形が表す意味を満たしている。そのため、これらの文は適格となる。このような、段階的な状態変化を表す場合は、(6)を満たすため、たとえ状態動詞であっても進行形にすることができる。

では、“I’m lovin’ it”は「マクドナルドがだんだん好きになってきた」という段階的な状態変化を表すのだろうか。実はこれも違うのである。なぜならば、このフレーズには、(7)の“more and more”にみられるような、段階性を表す表現がみられないからである。

chill time 沖縄語の世界

日本語	沖縄語
泡盛 (あわもり)	あーむい
黄色 (きいろ)	ちーる
果報 (かほう)	くわふー
黄金 (こがね)	くがに

ここに日本語とそれに対応する沖縄語 (首里方言)がある。
①～⑤の日本語を
それぞれ沖縄語で何というか予想してみよう。

① 地豆 (じまめ)
② 清ら (きよら)
③ 昨日 (きのう)
④ 電池 (でんち)
⑤ 沖縄 (おきなわ)



特集
読者からの声



前号に引き続き、文化交流学科の中山先生よりコメントを頂戴いたしました。ご覧のとおり、頂戴したご意見はいくつかの点にいい機会だと思い、今回は、いくつかの点に対する回答のために学生とともに調査しました。

(中山先生からのコメント)
Issue 3でとりあげてくださりありがとうございます。また、反論、コメントありがとうございます！
以下、自説の修正、一部撤回と、三輪先生のコメントへのさらなる反論です。

【「映える」についての植木説】
Issue 2の植木氏の説、「「インスタ映え」の前要素省略→「映(ば)え」→動詞への転成「映(ば)える」」について、もう一度考えてみました。日本語においてこういった例がまれであることは間違いないと思います。しかし、説としてアリかもしれないと思うようになりました。異説を唱えましたが、この点は植木説支持に回りたいと思います。

【複合語の短縮、省略の認定、意味変化】
複合語の短縮、省略について、三輪先生が挙げていらした／長期休暇／を意味する「休み」は、前要素省略とは言いがたいと思います。「休み」と「長期休暇」が上位語・下位語の関係になっています。／授業や仕事がない時間や日、期間／を意味する「休み」という単語を、その文脈では、／長期休暇／をさして使用していると考えたほうがシンプルではないでしょうか。また、そういうことを言いたすと、「4月下旬だし、そろそろ人形をだそうか」という文に

おいて（雛人形でなく、フランス人形でもなく）／五月人形／をさすとき、「人形」は「五月人形」の前要素が省略されたものだという理屈も成立してしまいます。きわめて面倒なことになってしまわないでしょうか。
次に、複合語の短縮、省略と意味変化について、やはり広く日本語に起こる現象とは言いがたいです。では、短縮、省略によって意味変化が起こる例は、本当はないのでしょうか。…なさそうですが、「ググる」はどうでしょうか。複合語でないので少し話がずれますが、もとの「グーグル」と異なり、／ウェブ検索する／くらいの意味になっているとすれば、意味拡大が起こっていると言えます。ですので、短縮、省略によって意味変化が起こることを完全に否定するのは、やめておきます。

【「インスタ映えする」について】
「インスタ映えする」について、たしかに「インスタ映え」に「する」がついて「インスタ映えする」と動詞として使われます。その点において後要素が動詞の複合名詞を分類できることはそのとおりだと思います。しかし、だからといって、動詞「インスタ映えする」がもと（さき）とは、そう簡単に言えないように思います。もしも、「インスタ映えする」という複合動詞があるなら、複合動詞がもと（さき）と考えられますが。（参考例：「泡立つ」→「泡立ち」、「指さす」→「指さし」、「腰掛ける」→「腰掛け」）。

【再帰性について】
山崎晃太郎さんに対してなんですが、（記事「学生Y魔改造計画」）最近出た本のうち、日本語訳が出ているなかで、人間言語を特徴づける特徴としての「再帰性」を否定する論考を読みました。ケイレブ・エヴェレット、大久保彩 訳（2025）「第8章 ○○に目がない？ 文法の普遍性と相対性」『無数の言語、無数の世界 言葉に織り込まれた世界像を読み解く』みすず書房
[Everett, Caleb (2023) "Chapter 8: Big into What?" A Myriad of Tongues: How Languages Reveal Differences in How We Think. Harvard University Press.]
議論としては、前からされていることでしょうし、当然、チョムスキーも反論しているのではないかと思います。
これは（も？）、山崎さんに対するコメントというより、三輪先生に対するコメントになってしまうかもですが・・・。

以上です。ゼミで共有していただけたら幸いです。

中山健一

以上のコメントに対し、【複合語の短縮、省略の認定、意味変化】に対する返答は西野記者が、【「インスタ映えする」について】に対する返答は三輪と益子記者が、そして【再帰性について】に対する返答は三輪が行います。

【複合語の短縮、省略の認定、意味変化】への返答

この点に関し、当ゼミ内で、上位・下位カテゴリーの関係にない短縮の例のうち、意味変化が生じる語の組みの有無を検討した。その結果、短縮語になることで意味変化みられる例として、「お姉（ねえ）」や「フェミ」という語が挙がった。多様な価値観が共存する今日においてあまり適切ではない表現が含まれることは理解しているが、言語学的事例として挙げさせていただく。

1つ目の「お姉」は、当然「お姉さん／お姉様」からの短縮である。周知のとおり、この語は女装家などの俗称として用いられている。この意味はすでに辞書に掲載されており、『大辞泉』では「①姉または若い女性を親しんでいう語。②俗に、女性特有の言葉遣いやふるまいをする男性」、『新明解国語辞典 第八版』では「①自分より年上の女性を親しんで呼ぶ語。【くだけた呼称】②俗に、女性の特徴とされる言葉遣い・髪型・化粧・服装などを過度に強調して身に付ける男性（人）」と記載されている。

これらにみられる②の意味は、短縮前の「お姉さん」には存在しない。『大辞泉』では、「お姉さん」の意味を「①（御姉さん）自分の姉や他人の姉、あるいは、家庭内で姉にあたる人を敬い親しんでいう語。②若い女性を親しみをこめて呼ぶ語。③（御姐さん）「ねえさん③・④」を親しんでいう語」と記載している。なお、「ねえさん」の③と④の意味は、「③（姐さん）旅館や料理屋などで、客が女性の従業員を呼ぶ語。④（姐さん）芸者などの間で、先輩を呼んでいう語。あねさん」である。また、『新明解国語辞典 第八版』では、お姉さんの意味は、「〔姉〕の尊敬語。自分の姉に呼びかける（を指して言う）語。また、相手や話題にしている第三者の姉を指して言う」とされている。

以上のことから、短縮語である「お姉」は、短縮前の「お姉さん」から意味変化が生じているといえる。

2つ目に挙げた「フェミ」とは、「フェミニズム／フェミニスト」の短縮語である。「フェミニズム」とは男女同権やジェンダー平等を求める広範な社会運動や学問（ジェンダー論など）のことであり、「フェミニスト」はその支持者を指す。『大辞泉』によると、「フェミニズム」は、「①女性の社会的、政治的、経済的権利を男性と同等にし、女性の能力や役割の発展を旨とする主張および運動。女権拡張論。女性解放論。②女性尊重主義」とある。一方、フェミニストは、「①男女同権論者。女性解放論者。女権拡張論者。②女性を大切に扱う男性」とされている。

これに対し、これらの短縮語であるフェミはこれらの意味を表すだけでなく、特にネットスラングにおいて批判的意味を含む場合がある。この意味は辞書での掲載は管見の限り観察されていないが、一部のSNSでは過激派と受け取られたフェミニストを揶揄して指す場合に用いられる事例が観察できる。

上記の2つの語の例からもわかるように、カテゴリーの上位・下位関係を持たない短縮によって意味変化が生じる語は少なからず存在するといえる。

(西野羽煌)

(三輪による補足)
ただし、これらの意味変化は、短縮という語形成がそのまま意味変化につながっているとはいえない。例えば、「お姉」は短縮によって上記②の意味が生じたのではなく、短縮語「お姉」が特定の文脈で使用され、その結果、短縮語のみに意味拡張が起きたと想像できる。また、「フェミ」も、短縮されたことによって上記の批判的な意味が生じたのではなく、ネット上で一部の過激な主張をすると受け取られた人々を、他のフェミニストと区別するために短縮語である「フェミ」が用いられたと考えるのが妥当であろう。
そもそも、短縮語には「ミワ先生→ミワ先」や「ポリスマン→ポリ」のように、元の語に対する親近感を表したり、敬意を削ぎ落としたりする効果がみられる。このような短縮による効果が働いた用法が定着した結果、上記の意味変化が起こったと考えられる。

引用文献
『新明解国語辞典 第八版』三省堂。
『大辞泉』小学館。

【「インスタ映えする」について】への返答

Issue 3の「読者からの声」では、伊藤・杉岡(2002)の「する」を伴うことができないか否かに基づく動詞由来複合語の分類をそれぞれ「V-O型」と「V-M型」として紹介しました。その中で、「する」を伴うことができる「V-M型」の動詞由来複合語が、語根の複合体である[NV]に動詞化接辞であるvを伴うことで[[NV]-v]という構造で派生するという自説を述べました（三輪 2026）。この説に基づくと、「インスタ映え」という複合語は、「インスタ映えする」という複合動詞が元となり、その語根部分が（品詞転換などにより）独立して複合名詞として派生することになります。この点に対し、複合名詞が先行する可能性もあるのではないかという今回のご指摘につながります。

今回の先生からのご指摘を受けて、上記の私の回答が、ある誤りを犯していたことに気がつきました。その誤りとは、先の植木記事や中山先生からのご回答は、歴史的な語形成過程を論じていたのに対し、自説である「「インスタ映え」複合動詞由来説」では、分散形態論的に基づいた形態論的な派生過程を論じていた点にあります。つまり、私の念頭にあったのは、「インスタ映え」という表現を用いる際、その都度頭の中で構築される形態論的派生の順序を論じていたことになります。ご存知のとおり、分散形態論では語は語としてレキシコン内に格納されているのではなく、語根や機能形態素が言語派生のたびに結合しながら語として形成されると考えます。私はこの派生過程と歴史的な語形成過程を混同し、歴史的語形成過程は形態論的派生過程をなぞると暗黙理に考えてしまっていました。そのため、我々の議論が同じ現象を議論しているようで、異なるレベルでの議論となってしまいました。

さて、この歴史的語形成過程と形態論的派生過程の違いは、生物学でいうところの系統発生と個体発生の違いに対応するといえます。しかし、個体発生が系統発生をなぞるという従来の学説が否定されているように、歴史的語形成過程と形態的派生過程が表裏一体であるという根拠は管見の限り存在せず、あくまで私の憶測に過ぎません。しかし、一方で、歴史的誤形成過程と形態的派生過程に対応関係がないというのも直観的に疑問を覚えます。

そこで、私のゼミで、歴史的語形成過程は形態論的派生過程に対応するかどうかを調査するプロジェクトを立ち上げました。本プロジェクトの手始めとして、複合名詞「インスタ映え」と複合動詞「インスタ映えする」が、歴史的にどちらが先に形成されたかを調査いたしました。以下で、益子記者に報告してもらいます。

(三輪)

1. はじめに
本記事では、複合名詞である「インスタ映え」と複合動詞である「インスタ映えする」の歴史的な出現順について調査した結果を報告する。

2. 方法
「インスタ映え」および「インスタ映えする」といった語はSNSの中で生まれた複合語であり、その語の普及にはSNSのユーザたちが大きく関与したと考えられる。そのため、これらの語の出現順を調査するには、SNS上の投稿を分析するのが有効である。今回はX（旧Twitter）を用いることにしたが、その理由は、XがInstagramと異なり過去の投稿を時系列順に検索でき、語の出現時期を確認することが可能であるためだ。さらに、XにはGrokという生成AIが実装されており、X内の投稿データに直接アクセスできる。これにより、X内で話題のニュースなどを把握、分析することができる。この機能を使用すれば、X上で過去に「インスタ映え」、「インスタ映えする」を使用した投稿がいつ頃現れたのかを調べることが可能になる。以下ではGrokを用いた「インスタ映え」「インスタ映えする」の出現順についての調査結果を示す。

3. 結果
Grokを用いて過去の投稿を検索したところ「インスタ映え」という語を含んだ最も古い投稿は2011年12月29日の「メモ：インスタ映え」というものだった。この結果だけを見ると、初出は「インスタ映え」という複合名詞となる。しかし、これだけでは、この投稿が流行語となる「インスタ映え」の起源であるとは断定できない。なぜならば、「インスタ映え」という語が流行語になったのは2017年であるのに対して、初出となった時期は2011年と約6年の隔たりがあるからだ。この間、2011年内でほかに使用されている例はみられず、その後数年の間でも「インスタ映え」の使用はほとんど観察されない。つまり、2017年に流行語になったことを考えると、この初出は2011年の時点で誰か一人がその表現を使用した一例に過ぎず、この投稿が2017年の流行につながるものであるとは言い難い。語の成立や普及を論じるなら、その時期での継続的な使用例を確認する必要がある。したがって、「インスタ映え」という語を含む投稿が多数確認できる年の中で最も古いものを探すことにした。

それぞれの年に「インスタ映え」という語を含む投稿が何件あるかをGrokで確認したところ、2011年から2014年までは数十件程度の投稿しかないが、2015年になると百件以上の投稿が確認でき、増加傾向にあることが明らかになった。翌年の2016年には数百件規模に増加しており、その次の年には流行語大賞を受賞していることから、少なくともX上で流行につながる「インスタ映え」が普及し始めたのは2015年ごろと判断できる。

Grokに2015年の中で最も古い投稿を提示してもらったところ、1月から5月末までは「インスタ映え」を含む投稿を確認できなかったが、6月30日になってようやく以下の複数の投稿が確認できるようになる。なお、以下の投稿はすべて異なるアカウントによるものである。

- (1) a. インスタ映える作業場でランチをいただいています
b. インスタ映えるように映してみました（意識低い系を装った意識高い系の写真風）
c. オシャレ女子から『インスタ映える写真』の撮り方を教えてもらう。わっ、洒落臭い☆
d. 今作りたいのはインスタ映える朝ごはんて...まったくありえへん
e. インスタ映え（笑）

これらの投稿のうち、(1e)を除く4件の投稿では複合動詞「インスタ映える」が用いられている。また、(1e)は「する」を伴っていないものの、複合名詞であることを示す助詞などの要素を伴っていない。複合名詞であることが明示的でないため、(1e)は複合名詞の用法としてカウントしないことにする。

その後の投稿も見よう。翌月以降には以下の投稿がみられ、ここで初めて「する」を伴わない「インスタ映え」が観察されるようになる。

- (2) a. 1日1インスタ映え（2015年7月19日）
b. インスタ映え120点！トレンドの“おちゃめサングラス”はプチプラで手に入れよ♡（2015年7月31日、メディア記事共有）
c. パンケーキとアサイーボウルが流行ったのはインスタ映え＝instagramで映えるからだと思っている（2015年7月31日）
d. インスタ映えしないポテサラ食べてますけど。
e. リアンくんミーハーだし、インスタ映えするご飯とか写真め好きだからInstagramやればいいのに！プライベートでやってそうだけど（2015年8月31日）

これらの投稿のうち、(2a)は数詞を伴っていることから、「インスタ映え」が複合名詞として用いられていることがわかる。(2b)は「迫力満点」のようなある名詞に対する点数評価をする表現であるため、複合名詞であると判断できる。次に、(2c)では「する」を伴わない「インスタ映え」となっているが、直後で「instagramで映える」と等号で結ばれていることから、「インスタ映える」における「する」の無記載であると判断できる。(2d)は、否定辞を伴って「インスタ映えしない」となっているため複合動詞である。最後の(2e)も、「する」を伴う複合動詞である。
このことから、(1)の投稿から20日～2ヶ月の範囲で観察される「インスタ映え」を含む表現は、2件が複合名詞、3件が複合動詞であることがわかる。

4. 考察
以上の結果から、「インスタ映え（する）」と言う表現の草創期において、観察される「インスタ映え」を含む10件の投稿のうち、7件が複合動詞「インスタ映える」、2件が複合名詞「インスタ映え」であり（1件不明）、わずかな差ではあるが、複合動詞が先行して使用されていたことがわかる。
（益子晃）

（三輪補足）
上記の益子記事では、流行語につながる「インスタ映え」の使用の草創期である2015年6月から8月において、複合名詞としての使用が(2a, b)の2件のみとの報告がありました。これらの投稿について、さらに私の方から追記させていただきます。

まず、(2a)の「1日1インスタ映え」という投稿ですが、これは「一日一善」の「善」部分に「インスタ映え」を挿入した表現であるのは明白です。この「善」は、当然ながら抽象的概念としての善ではなく、善行のことを指しています。このような行為を表す名詞（影山(2011)の「デキゴト名詞」に該当）の代わりに、それ以前に使用されていた「インスタ映える」という複合動詞の複合的語根部分を抜き出した「インスタ映え」を、複合名詞として使用した例が(2a)なのではないでしょうか。

この語形成過程の背景にあるのは、前号で中山先生がご指摘された「類推（もしくは日本語話者の性向）」だと思います。つまり、(2a)の例は、「善」という名詞部分に代入する語として、「インスタ映える」という複合動詞の語根部分を複合名詞であると（誤って）類推し、取り出して「一日一善」に代入したことで成立した表現であるということです。

次に、(2b)の「インスタ映え120点！～」の投稿ですが、これはネット記事の見出しとして使用されたものです。この記事の見出しという点がポイントで、劉(2017)は、新聞見出しの特徴の1つとして「臨時一語」の多用を挙げています。臨時一語とは、レキシコン内の語彙化された語彙ではなく、文構成の過程で即席で作られる語のことです。

この臨時一語の特性の1つとして、仁田(1997)は、省略・凝縮の機能を挙げています。仁田によると、臨時一語の中には、もともと述語であった表現を名詞に凝縮することで即席の複合名詞を作る機能があります。例として、「規定を見直す」からの「規定見直し」や、「原発を再稼働する」からの「原発再稼働」などが挙げられます。

(2b)が臨時一語を特徴に持つ記事の見出しであり、臨時一語の機能として省略・凝縮が挙げられることから、ここでみられる「イン

スタ映え」も述語である「インスタ映える」からの凝縮によって名詞化したものである可能性は高いと思われます。

このように考えると、(2a)は既成の四字熟語の名詞部分への代入のための類推から、また(2b)は見出しとしての臨時一語の効果から、ともに「インスタ映える」から名詞化した例である可能性が指摘できます。断定するにはより詳細な調査を要しますが、その可能性は大いにあると思われます。

なお、2015年9月から10月にかけては、個人による「インスタ映え」を含む投稿は、複合動詞「インスタ映える」に限られ、複合名詞「インスタ映え」はネット記事の見出しに限定されます。おそらく、この見出しの使用で複合名詞「インスタ映え」が定着したのでしょう。2015年11月に入って、以下の投稿が現れます。

- (3) a. インスタ映え...これぞFB厨なお言葉#クロス（2015年11月30日）
b. 「インスタ映え」って言葉死ぬほどむず痒くて好き（2015年11月30日）

これらの投稿では、「インスタ映え」が単独で取り出されているだけでなく、この表現が固定化した表現となりつつあることが伺えます。我々は、この頃が複合名詞としての「インスタ映え」の定着期であると考えています。

本記事では、中山先生からのコメントで浮き彫りになった「歴史的誤形成過程が形態論的派生過程をなぞる」という私の憶測が、単なる憶測であるのかどうかを確かめるために、ゼミ内で組んだプロジェクトの調査結果を報告してきました。その結果、「インスタ映え（する）」という動詞由来複合語に限定すると、2015年の夏から秋にかけて「インスタ映える」から「インスタ映え」への語形成過程が観察されました。この調査は継続して行い、そこで明らかになった結果は将来的に本紙で発表させていただきます。

引用文献
伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』研究社, 東京.
影山太郎 (2011) 『名詞の意味と構文』大修館書店, 東京.
三輪健太 (2026) 「日本語の語彙的複合動詞にみられる非対称性と並置構造分析」『大みか英語英文学研究』29, 51-80.
仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版, 東京.
劉吉香 (2017) 『新聞見出しに関する研究－構文的な特徴を中心として』関西外国語大学博士論文.

【再帰性について】への返答

Everettの再帰性批判については、私が大学院生時代に大いに話題になりました。ただ、その当時を知る者としては、批判を受けた側である生成文法陣営の反応はいささか冷ややかなものであるという印象を持っています。

私が大学院生をしていた2010年代前半は、『Science』に掲載されたHauser et al.(2002)によってChomskyが初めて人間言語の進化に言及し、そこから「進言言語学」という学際的分野が勢いを増してきた時代でした。Hauser et al.では人間言語の中核部分に特有の性質として再帰性(recursion)が挙げられており、この再帰性につながる言語操作である「併合(Merge)」の創発が人間言語の進化を引き起こしたというのが当時の通説でした。そこに、Everettのビダハン語による再帰性批判が投げ込まれたわけですから、本来であれば大事件となってもおかしくなかったわけです。

このEverettのビダハン語に基づく再帰性批判をめぐる論争は、中井(2014)が詳細にまとめています。この論争を時系列にまとめてみます。まず、生成文法では1960年代から再帰性という用語を使用し続けていますが、そもそもこの用語に統一的な解釈が与えられてきたかどうかについては、疑問の余地があります。前号の山崎記事にもあるように、1960年代の生成文法では、句構造規則の繰り返し（再帰的適用）により埋め込み構造(embedding)が得られます。このことから、句構造規則の再帰的適用と埋め込み構造が同一視される誤解が生じました（Chomskyの書き方も一因だと思います）。しかし、1970年代以降、先生文法の中で句構造規則自体が撤廃され、句構造の構築理論が変遷しました。そして、上述の併合が提案された1990年代半ばになって、ようやく再帰性が、併合の再帰的適用のことであることが明確に表明されました(Chomsky 1995, pp. 225-235)。これ以降、生成文法では再帰性と埋め込み構造は明確に区別されることになります。

一方、Everettは、当初はビダハン語には埋め込み構造があると主張していたのに対し、Everett(2005)でこれを訂正し、ビダハン語には埋め込み構造がないという主張を初めて展開しました。Everettによると、ビダハン語はSOV言語であり、埋め込み構造があるならば（日本語のように）[S[SV][V]]という構造になるはずですが、ビダハン語では同様の意味構造を[SV][SV]のような並列構造(parataxis)によって表します。このことから、Everettは[S[SV][V]]構造の欠如を埋め込み構造の欠如に結びつけています。

ここで注目すべきは、この論文の時期と使用されている用語です。2005年というのはHauser et al.の論文が世に出てすぐの頃で、再帰性が話題沸騰だった時代です。そこで、過去に再帰性と「≡」とされていた埋め込み構造を持ち出して、それがビダハン語では存在しないという主張をしたわけです。論文内ではHauser et al.への直接的な批判はなされてはいないものの、他言語にはみられない特性の1つとして埋め込み構造の欠如を挙げていることから、Everettに再帰性批判の意図があったことは確実でしょう。

このEverettの主張に対し、生成文法陣営から批判をしたのがNevins et al.(2009)です。彼らの主張の核は、①Everettによる批判（と受け取れる主張）は、再帰性を埋め込み構造と同一視した誤解によっており、②そもそもビダハン語にも再帰性はおろか、埋め込み構造も存在するという点です。上述のとおり、1995年以降の生成文法理論では、明確に再帰性が併合に対する概念であることが共有されていますので、仮にビダハン語に埋め込み構造が存在しないからといって、併合の繰り返し適用が観察される以上は、ビダハン語に再帰性がないということにはならないわけです。

続いて、②の主張は語順や否定の作用域などの統辞的分析に基づいています。上述のとおり、Everettは、ビダハン語に埋め込み構造がない証拠として語順を挙げています。しかし、Nevins et al.によると、目的語名詞句ではSOV語順だが補文だとSVO語順になる言語形式を用いる言語は他にもみられ（ヒンディー語やドイツ語など）、一見すると並列構造にみえても埋め込み構造であることは珍しい現象はありません。

また、Nevins et al.は、否定の作用域の観点からも、ビダハン語に埋め込み構造が存在することを示しています。否定の作用域とは、否定辞による否定の意味が及ぶ領域のことです。例えば、(4a)では主節において否定辞notが用いられており、その否定の意味は不定詞部分にまで及んでいます。言語学的に不定詞は非定形語と呼ばれ、補文の1種です。このように、主節内に置かれる否定辞の否定の意味は補文にまで及びます。これに対し、(4b)では(4a)の補文部分が独立した文として並列されています。この時、第1文に置かれる否定辞の否定の意味は第2文にまでは及びません。このことから、否定の作用域は文の境界を跨いで及ぶことがないことがわかります。

- (4) a. I am not ordering you to make an arrow.
（私はあなたに矢を作れと命じているわけではない）
b. I am not giving you an order. Make an arrow!
（命令しているわけじゃない。矢を作れ!）

Nevins et al.は、(4b)と同様の構造を持つビダハン語の表現において、つまり一見すると並列関係にみえる構造においても、(4a)のような否定の作用域が及ぶことを指摘しています。このことは、第1文と第2文にわかれているようにみえても、それぞれ主節と補文の関係にあることを示唆しています。

以上が、Nevins et al.によるEverettへの反論です。この後、両陣営は幾度も論戦を交えるのですが、再帰性は是非という中核的な論点から外れたところでの議論に移っていくこととなります。私も基本的にはNevins et al.と同様の立場をとっています。

引用文献
Chomsky, N. (1995) The Minimalist Program, MIT Press, Cambridge, MA.
Everett, D. L. (2005) “Cultural Constraints on Grammar and Cognition in Pirahã: Another Look at the Design Features of Human Language,” Current Anthropology, 46, 621–646.

Hauser, M. D., Chomsky, N., and Fitch, W. T. (2002) “The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?,” Science 298, 1569–1579.
中井悟 (2014) 「ビダハン論争をめぐって」『同志社大学英語英文学研究』92, 57-152.
Nevins, A., Pesetsky, D., and Rodrigues, D. (2009) “Pirahã Exceptionality: A Reassessment,” Language 85, 355–404.
（三輪健太）

現代英語学科三輪ゼミ開発
英文法用語検索アプリ

IC生限定



choco
GRA

英語学習時のおともに

わからない英文法用語をササっと検索

先生やテキストの解説がわからない。それは英文法用語の理解不足が原因かもしれません。そんな時、スマホでササっと用語を検索して、英語学習の効率を高めましょう。

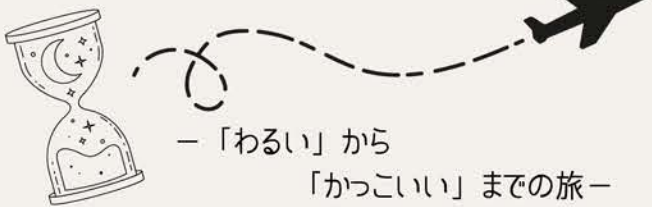
アプリ登録の際は、以下のリンクからインストールしてください。インストールの際に、スマホのほむ画面に保存すれば、いつでもどこでも知りたい用語が検索できるようになります。



<https://kenta-miwas-team.adalo.com/social-media-app>



ことばのタイムトラベル



—「わるい」から
「カッコいい」までの旅—

この夏、Michael Jacksonの伝記映画『Michael』が公開されており、彼の楽曲を耳にする機会も増えた。先日、彼の代表曲の1つである『Bad』を聴いていた時に、サビで“*I'm bad*”が繰り返されていることにふと気になった。なぜ自身を悪くいうのか不思議に思い、いくつかの英和・英英辞書で“*bad*”の項を調べてみた。すると、複数の辞書にアメリカ英語のスラングとして「すばらしい」や、「最高だ」、「カッコいい」などの意味が掲載されていた。例えば、『Genius 第6版』には「(米俗) すばらしい、カッコいい」とあり、比較級、最上級がそれぞれ“*badder, baddest*”となる旨が記されている日本語にも「やばい」などの例がみられるが、言語には本来否定的な意味で使用されていた語が、逆転して肯定的な意味で使われる現象がある。このような意味変化を「語義向上(amelioration)」という。英語の“*bad*”はまだまだ否定的意味が優位であるが、上記の意味変化は語義向上の事例であるといえる。本稿では、われわれが知っている英単語のなかで、語義向上の結果、現在の意味となっている事例を紹介する。

○“nice”

1つ目は、「素敵な、感じのいい」といった意味で使われる“*nice*”である。日常会話でも頻繁に登場する語であり、誰かを褒める際に使われることも多い語だが、もともとの意味は現在のそれとは大きく異なるものだった。

実は、“*nice*”は長い歴史の中で何度も意味を変えてきた語として知られている。オンライン上の語源辞典である『Online Etymology Dictionary』によると、“*nice*”の語源は、ラテン語の「知らない、無知な」という意味を表す“*nescius*”まで遡る。この語は、“*science*”と同語源で「知る」という意味を表す“*scire*”に、否定の接頭辞である“*ne-*”を伴ってできた語である。その後、12世紀頃の中古フランス語において「不注意な、不器用な、弱い、貧しい、愚かな」という意味を表す“*nice*”として使用されるようになる。古フランス語では「愚かな、物事をよく知らない、不真面目な、非常識な」といった、人に対する否定的な性質を表す意味で用いられていた。これが13世紀後半になって英語に借用され、

「愚かな」という意味で使用される。さらに、14世紀後半に至るまでに、「臆病な」や「細かいことばかり気にする、神経質な」という意味で使われるようになった。この時期までは、まさに現在の肯定的な意味とは正反対であり、かつ人の性質に限定されていたことがわかる。

その後、15世紀ごろから、「好みがうるさい、繊細な」という意味が生じ、このあたりから徐々に貴族社会の間で「細かな違いを見分けられる」といった肯定的な評価へと結び付けられるようになる。これにより、“*nice*”における語義向上が始まる。やがて15～16世紀になって「上品な、洗練された」という意味を持つようになり、さらに18～19世紀になると「礼儀正しい、親切的な」といった意味が加わる。このあたりから、現在のよう一般的な肯定的な意味で広く使われるようになったのである。

○“travel”

次に紹介するのは、「旅行」を意味する“*travel*”である。“*travel*”という語を聞くと、多くの人が休暇に観光地を巡ったり、国内外に出かけたりする楽しい旅を連想するだろう。しかし、この語は元々そのような楽しい旅とは異なる意味を持っていた。

『Online Etymology Dictionary』によると、“*travel*”の語源は、元々は「苦勞して進む」という意味を表す古フランス語の動詞“*travailler*”である。この語は、さらにラテン語の“*tripalium* (拷問器具)”に遡ることができる。これらのことから、“*travel*”には現代の「旅行」とは程遠い、苦勞や困難などの否定的な意味が含まれていたということがわかる。

その背景には当時の移動事情が大きく関係している。当時は鉄道や飛行機は存在せず、人々は徒歩や馬を使って長距離を移動していた。また、旅の目的も観光ではなく、軍事活動や交易などが中心であった。道中では病気や事故、盗賊などの危険が常につきまとい、旅は娯楽というより試練に近いものだったのである。

そんな苦痛と危険を伴う旅行が楽しそうな意味合いを持つようになったのは、産業革命後のことである。産業革命により蒸気機関車が登場し、人々は以前より安全かつ短時間で遠方へ移動できるようになったのだ。そして、旅は一部の人だけの特別なものではなく、多くの人々が楽しめる娯楽へと変化していく。こうした社会の変化とともに、*travel* もまた「苦勞を伴う移動」から「旅行」を意味する語へと姿を変えていったのである。

英単語の意味は長い歴史の中で社会や文化、人々の価値観の変化に合わせて少しずつ変わってきた。語義向上という意味変化により、現在肯定的に受け取られている意味も、数百年前にはまったく異なるものだった場合が多く存在する。語は単なる「記号」ではなく、その時代を生きた人々の暮らしや考え方を映し出す鏡でもある。普段何気なく使っている英単語も、その語源や歴史を知ること

引用文献

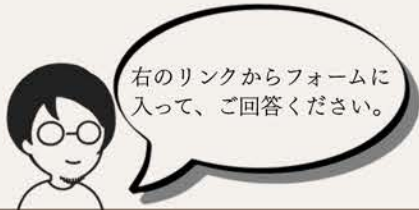
『Online Etymology Dictionary』, 2026/7/14 アクセス
(市川莉玖)

新コーナー
“Notes and Queries”
次号から開始します

投稿募集中！！

次号から、新コーナーとして“Notes and Queries”が始まります。このコーナーは、読者の皆さんが日頃の生活や語学で疑問に思っていることや、ことばに関する雑感を投稿していただき、現代英語学科三輪健太先生監修の下、本紙記者が回答するものです。テキストの解説を読んでも納得がいかないこと、ある言語表現がなぜ成立するかわからない。そんな時に、ぜひ質問をお寄せください。素朴な質問でも問題ありません。ことばに関して不思議に思っていることや、困っていることがあればなんでもご質問ください。

“Notes and Queries”への投稿は、
「『The LinguistIC』N&Q投稿フォー



Instagramをやってます

The LinguistICは、本紙情報を発信するためのInstagramを更新しています。刊行の案内や作成風景などを発信していく予定です。ぜひフォローをお願いします。

右のリンクからご覧いただけます→



The LinguistIC 第4号

発行日	2026年7月28日
発行者	現代英語学科 三輪健太ゼミ
編集長	植木綾那
監修	三輪健太
記事執筆者	5名
レイアウト	市川莉玖



※オンラインからでもご講読いただけます。
右のリンクからダウンロードしてください。

最新刊はコチラから バックナンバーはコチラから



chill time の答えと解説

chill time の答え

- ①じまみ ②ちゅら ③ちぬー ④うちなー ⑤まーい

～解説～

まず、日本語と沖縄語の音の対応関係について考えてみる。この際、平仮名には1字で母音と子音を表す文字があることに注意する。

はじめに、日本語から沖縄語への「泡盛(あわもり)」の音韻変化に注目してみる。「*awamori→aamui*」の変化した部分は、子音「*w*」と「*r*」が脱落している点と、「*mo*」が「*mu*」に変化している点である。このことから、沖縄語の音韻規則の暫定的な仮説として、(仮説1)「*w*」が脱落する」、(仮説2)「*r*」は脱落する」と、(仮説3)「*mo*は*mu*になる」を立てておく。

次に、「黄色(きいろ)」の音韻変化に注目してみる。「*kiiro→chiiru*」の変化した部分は、「*ki*」が「*chi*」に、そして「*ro*」が「*ru*」となっている点である。まず、「*ki→chi*」の変化から、(仮説4)「*ki*は*chi*になる」を立てる。また、「*ro→ru*」では、「泡盛」における「*mo→mu*」の例と同様に、オ段の音がウ段に変化している。よって、仮説3を修正し、「子音に関係なく「*o→u*」という変化が起こる」とする(仮説3改)。

一方、「*ro→ru*」の変化において「*r*」が脱落していないことから、沖縄語では「*r*」が脱落するという仮説2が誤りであったことがわかる。両者の大きな違いは「*r*」がつながる母音が挙げられる。つまり、オ段では「*r*」の脱落が起こり、イ段ではこの脱落が起こっていない。このことから、少なくとも、仮説2を「オ段では「*r*」の脱落が起こるが、イ段では起こらない」と修正する(仮説2改)。

続けて、「黄金(こがね)」の音韻変化に注目する。「*kogane→kugani*」の変化した部分は、「*ko*」が「*ku*」に、そして「*ne*」が「*ni*」となっている点である。「*ko→ku*」の変化に注目すると、カ行でも「*o→u*」の変化が起きているため、仮説3改の妥当性はかなり濃厚になってくる。

ここで、「黄色(きいろ)」と「黄金(こがね)」の1音目の変化の有無を比較する。「黄色(きいろ)」では、「*ki→chi*」という子音の変化が起きているのに対し、「黄金(こがね)」では子音の変化は生じていない。両者の違いは、仮説2の修正時と同様に、子音につながる母音異なる。このことから、カ行でも母音の違いによって変化するものとそうでないものがあることがわかる。すると、「カ行において「*k→ch*」への子音変化が起こるのは、少なくともイ段においてであり、オ段では起こらない」と結論づけられる。これを仮説4改とする。

今度は、「電話(でんわ)」の音韻変化を詳しくみていく。「*denwa→dinwa*」の変化した部分は、「*de*」が「*di*」となっている点である。「黄金(こがね)」の音韻変化と比較すると、子音にかかわらずエ段の音が「*e→i*」と変化していることがわかる。このことから、「*o→u*」と同様に、「子音に関わらず「*e→i*」と変化すると予測できる。これを、仮説5とする。

一方、ここでは「*wa*」の音は日本語と沖縄語で変化していない。このことから、「*w*」が脱落とする仮説1が誤りであることがわかる。ここで、「泡盛(あわもり)」と「電話(でんわ)」における「*w*」の音韻環境を比較する。そうすると、「泡盛(あわもり)」の時は「*wa*」の前が母音の「*a*」であるのに対し、「電話(でんわ)」の時は「*wa*」の前が子音「*n*」であることがわかる。このことから、仮説1を、「「*wa*」の前が母音「*a*」である場合に「*w*」が脱落する」と修正する(仮説1改)。

最後に、「手分け(てわけ)」の音韻変化をみていこう。「*tewake→tiwaki*」で変化した箇所は、「*te*」が「*ti*」に、そして「*ke*」が「*ki*」に変化している点である。ここでも、「*e→i*」の変化が起きており、「*e→i*」の仮説5はほぼ確定しているといっていだろう。また、「*ke→ki*」であることから、エ段の場合に「*k*」が「*ch*」へと変化するという仮説4改も濃厚になってくる。さらに、今回の「*wa*」の前の音が子音「*te*」であり、かつ「*w*」が脱落していないことため、ここでも母音「*a*」の直後の「*w*」が脱落するという仮説1改に抵触していない。

ここで、これまでに立てた仮説をまとめると、以下のようになる。

【仮説群】

仮説1改: 「*wa*」の前が母音「*a*」である場合に「*w*」が脱落する
仮説2改: オ段では「*r*」の脱落が起こるが、イ段では起こらない
仮説3改: 子音に関係なく「*o→u*」という変化が起こる
仮説4改: エ段の場合に「*k*」が「*ch*」へと変化する
仮説5: 子音に関わらず「*e→i*」と変化する

上記の仮説群をもとに、①～⑤の日本語を沖縄語の音に置き換えてみる。そうすると、

- ①jimame→jimami 「*e→i*」
②kiyora→chiyura 「*ki→chi*」、「*o→u*」
③kinou→kinuu 「*o→u*」
④okinawa→uchinaa 「*o→u*」、「*ki→chi*」、「*awa→aa*」
⑤mawari→maai 「*awa→aa*」、「*ri→i*」

のようになると予想できる。

(市川莉玖)